神西清全集　第五巻

神西清全集・第五巻　昭和五十一年一月末日
第一刷刊行
印刷所東京都文京区小石川一丁目五番地　猪瀬印刷株式會社
製本所東京都千代田区麹町三丁目十二番地　吉原製本株式會社
發行所東京都文京区大塚二丁目十四番地　文治堂書店

頒價　七阡圓

目

次

Ⅰ

マルセル・プルウスト　一
マルセル・プルウストに就て　二
プルウストの或る姿態　三
マルセル・プルウストの音楽性　八
プルウスト　二五
カイヤヴェ夫人のサロン　四三
四肢の切断　四五
レイモン・ラヂゲ　四七
レイモン・ラヂゲ　四七
オノレ・ド・バルザック　五八

Ⅱ

現代文学の諸傾向　小説　八九
コント・ドロラティク　五八
『おどけ草紙』　六〇
アンドレ・ジイド　六六
『田園交響楽』　六六
ジャック・シャルドンヌ　七六
『ロマネスク』　七六
『愛をめぐる随想』　八一
ハンス・アンデルセン　八四
『即興詩人』　八四
ソヴェートの詩精神　一三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

十九世紀後半のロシヤ文学　一三五
ロシヤを素描する　一八五
ロシヤの国民性と文学　一三〇
ロシヤ演劇の擡頭　一八八
ロシヤ文学における自然と人生　一三四
復活したソヴェート文学の紹介　二〇五
ロシヤ文学の精神　一四五
露仏文学と日本　二〇七
ロシヤの智恵　一五六
ロシヤ文学展望　二一〇
ロシヤのシェイクスピア　一六六

Ⅲ

アレクサンドル・プーシキン　二二九
プーシキンの恋文　二九一
プーシキンの精神　二二九
詩人プーシキン　二九六
プーシキン散策　二三八
国民詩人プーシキン　三〇二
プーシキンの知性　二四二
プーシキン私鈔　三〇五
『大尉の娘』　二四五
プーシキンとロシヤ歌劇　三〇七
『スペードの女王』と『ベールキン物語』　二五一
プーシキンの情熱生活　三一三
『プーシキン遺珠』　二六二
プーシキンとその作品　三三〇
短篇六種の発生について　二七四
プーシキンと女・決闘・死　三四六

イヴァン・ツルゲーネフ
露文学史上のツルゲーネフの位置　三五二
『散文詩』の完訳　三五七
『散文詩』　三五八
ツルゲーネフ序説　三六五
父親としてのツルゲーネフ　三八四
ツルゲーネフ二題　三九八
ツルゲーネフ夜話　四〇三
ツルゲーネフと女性　四一〇
ツルゲーネフの女性たち　四二七
ツルゲーネフとその作品　四三八
アントン・チェーホフ
チェーホフの音楽性に就いて　四五〇
闘へるチェーホフに就いて　四六一
チェーホフの積極性に就いて　四七四
チェーホフの手帖　四八三
チェーホフの手帖に添へて　四八七
チェーホフの短篇に就いて　四八八
女性と教養　四九七
チェーホフ序説　五〇〇
樺太の徒刑囚　五四〇
チェーホフとその作品　五四七
チェーホフの本質について　五六二
チェーホフの戯曲　五六七
チェーホフ歿後五十年に際して　五七四
チェーホフの作品　五八〇
『犬を連れた奥さん』　五八〇
『決闘』と『妻』　五八五
『シベリヤの旅』　五九一
『かもめ』　六〇一

IV

ニコライ・ゴーゴリ
ゴーゴリの魔　六〇九
ゴーゴリの継承　六一八
レフ・トルストイ
トルストイ
『復活』について　六二〇
悲劇としての『アンナ・カレーニナ』　六二四
フョードル・ドストイェーフスキイ
ドストイェーフスキイと文学的方法　六二六
三つの恋愛と二つの結婚　六二九
ドストイェーフスキイに於ける女性像　六三三
ドストイェーフスキイの一季節　六三二
ドストイェーフスキイの現実　六三五
『永遠の良人』
如何に読むべきか　六五五
ニコライ・レスコーフ
レスコーフの系譜　六九七
『僧院の人々』　七〇二
『真珠の頸飾り』　七一〇
ヴァシーリイ・ローザノフ
肉体の落葉　七一八
ニエミーロヴィチ・ダンチェンコ素描　七四六
バーベリの胚胎　七五五
『虚無よりの創造』の邦訳　七五七
『意志の悲劇』寸感　七六〇

神西清全集　第五巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I

マルセル・プルウスト

マルセル・プルウストに就て

プルウスト（一八七一—一九二二）は何よりも先づ病人だつた。だから彼の生理的な報告から始めよう。——富裕なブルジョアの子として生れた彼は柔しい眼眸の所有者であつたが決して美男ではなかつた。真白な肉体、虚飾的な華車な様子、優柔な態度など彼の有つ柔弱な性質は人に不快の感を与へた。同時に彼の寛い善良な心やつつましやかな挙止は人をして彼を愛さずには居られなくした。晩年彼は色艶がすぐれず、腫んだ様なところさへ見え、その上品な様子には何かしら悩ましい自棄の情が混入して来た。彼は肉体的には猶太人の感じがし、病身であり、常規を逸した所すらあつた。両親の身を滅ぼして更に彼にまで伝つた病気、無為を愛する心、富裕、流行を追ふ軽薄な素質、猶太人といふ血統……此等のために彼は幼い時から孤独だつた。而も加之その繊弱な性格や深い教養や又過敏な感受性の為彼は気難しかつた。そして尚更人々から遠ざかつて行つた。

プルウストは『失はれたる時を索めて』といふ名で総括される一群の小説を書いた。これは彼の唯一の作物と言つても過言ではないのであるが、その量は七巻、大型の書物で十三冊を占めて居る。今までに外から受けた単独の印象のどれにも満足出来なかつた彼はこの一大長篇の中に、悦楽と歓喜の新しい結合を創り出さうとした。自分の裡の色々な要素（歓喜と苦痛の記憶）を分解し再び結合する事によつて彼は独創的な一つの世界を作り上げた。それは数へ切れぬ悦楽から成る一世界である。彼は人間の意識状態を創造し得る筆を持つてゐたのだ。

次に彼の文体も亦独創に満ちたものである。非常に乱雑であり乍ら而も柔軟性に富み紆曲蜿々の妙趣がある。

そして頗る技巧的修辞的であり、宮廷の寄木細工師も避ける程の贅沢さで、影像や叙述や枝葉の論議や感覚や理論やを寄せ集める。そこで出来上つた所は至極支離滅裂ではあるけれども、なほ甘美な快適な味ひを失つてはゐない。これらの事は僕の拙い訳筆に禍され乍らも猶幾分の美しさを失つてゐない前掲三つの断章を熟読さるるならば大体お分りにならうと考へる。因みに此処に掲げた断章は初めから断片として書かれたもので彼の大作前の文集『悦楽と日々』から抜いたものである。然乍らこれは惟ふに彼のノオト・ブックの様なものだつたのだらう。何故ならばこれらの断片は改竄され或は時としては元の儘で、「失はれたる時を索めて」の所々方々に発見されるからである。それにしても此の様に洗練され完全な形を有するノオトは珍らしいかも知れない。

（昭和三年四月、「創作月刊」）

プルウストの或る姿態

或ひはプルウストへの様々な「開けろ、胡麻！」、特にその一つに就て

私たちはプルウストの秘密について知りたがつてゐる。狂信的なこと（ジョルジュ・ガボリイの言葉で云へば誠実さ fidélité）で私たちを愕かす『失はれた時』をプルウストに書かせた力は何だらう。これを知ることは彼を知ることだ。プルウストがこの秘密の殉教者だつたことに比べれば、彼が一生喘息の殉教者だつたこと（従つて彼の早すぎる隠棲）などは小さな問題だ。

批評家たちは沢山の本を書いて此の秘密を探つた。それを読んで行くうちに私はあることに気が付いた。職業的秘密は人によつて別の場所に嗅ぎ当てなければならないと云ふことに。……ある伝統が安全に保たれてゐる時、伝統的な批評術は勿論安全だ。そしてさう云ふ時に生れ合せたら君は災難だと思ひ給へ。けれど私たちの時代は直観で職業的秘密を嗅ぎ当てなければならないのだ。プルウストに関する限り伝統的な批評家はみんな失敗した。

反対に見事に成功した幾人かを私は知つてゐる。

「音楽は一生のあらゆるイリュジオンを創出すことが出来る。音楽は時によし智性そのものと迄行かないでも、少くもその働きを暗示する所までは行くものだ。」――ポオル・ヴァレリイは音楽についてかう書いた。同じことをプルウストは『失はれた時』の中で次の様に言ふ。――「人には知れず暗にかくれ理性には漠とした表面をしか示さないこれらのイデエ（他界の真のイデエ）は、智性のイデエと一緒に記憶の全身像の中へはいつて来る。……」スワンのオデットへの恋をヴァンテゥイの音楽にまで昂めて行き乍らプルウストは音楽のふかい意義に到達したのだ。ブノア・メシャンは自分の発見にうたれた。そこで彼は『プルウストの作の音楽と不朽性』を書き、「音楽」の二字を合言葉に扉を開けようとした。

ジャン・コクトオの「開けろ、胡麻！」はブノア・メシャンのとはまるでちがふ。彼はプルウストの一生を第一期（俗生活）と第二期（孤独生活）に分ける考へ方を否定して言つた。――「プルウストが何より執着し、批評家には気晴らしに見えたこの俗生活こそ彼の薔薇模様の中核だつた。」この簡勁な断定の貴いのは殆どすべての批評家がこの点になると間違つてゐるからだ。みんなプルウストの喘息――吸入器が噴き出す濃霧にかかつて難破したのである。コクトオがどんなに見事にプルウストの秘密をつかんだかを彼の短い『プルウストの声』で見ることが出来る。

もう一人、ここに素敵に颯爽としたイギリスの批評家がゐる。それはクライヴ・ベルだ。彼だけはプルウストに憎まれ口を遠慮しなかつた。だが彼が『マルセル・プルウスト』の中に書いた次の文句は歯切れのよさで私たちを愉快にするだけのものではない。――「この注目すべき美学者の美学はかう要約出来ると思ふ。美こそ真、ラスキン的ラファエル前派だ。僕はじつは彼の美学と一合戦やるつもりだつたのだが、急にそれの何でもないことに気が付いた。問題は彼の真理のヴィジョンと彼がそれに到達した方法とにあるのだから。」言ひ換へればプルウストの詩に気が付いたのだ。ベルのペンは形而下的批評家のペンの尖のとどかない所を突いた。

然し「開けろ、胡麻！」と呼ぶのは批評家だけの仕事ではない。回想録の著者もさう呼ぶことが出来るのだ。私はその証拠にビベスコ夫人の『プルウストとゐる舞踏会』を持つて来る。夫人が批評家でなかつたことは断つて置く必要がある。のみならず夫人は現代の芸術家として不幸な部類にさへ属してゐる人だ。不幸な？　彼女が幾人ものミュウズの愛の証拠を手に入れる術を知らないからだ。彼女は一人か二人のミュウズからしか愛の証拠を貰へない。

プルウストのインテンションは全体としての真理（真理全体とは何処かしらちがふ）を捉へること、深海の怪獣を解剖するのでなしに生け捕りにすることにあつた。従つてプルウストに対するとき私たちのインテンションも「全体としてのプルウスト」を捉へることを欲する。「開けろ、胡麻！」は一ぺんに全体としての対象を顕はす呼声でなければならない。ビベスコ夫人の声はこれだつた。そして彼女が少数なミュウズたちの愛によつてプルウストとヴィジョンを捉へることに成功したのは、彼女の本が独特な回想録のスティルを持つてゐたからだと思ふ。私は彼女がこれに到達した方法について考へて見たい。誰もこの不思議な公爵夫人のやうには書かなかつた。

けれど公爵夫人の回想録を披くまへに私は少し道草をして、マルセル・プルウストの最も夙い理解者の一人だつたレオン・ドオデの昔話を辿つて先づ此の小説家の一つの姿態について見て置かう。

――カフェが文学や美術の揺籃である特権を半ば手離しかけてゐた頃（一九〇〇年――一九〇五年）のことである。リュ・ロワイヤルのレストラン・ウェーベルに毎晩七時半ごろ牝鹿の様な眼をした蒼白い青年がやつて来た。彼は支那の置物の様に毛織物にくるまり垂れ下つた鳶色の口髭を半ば唇にくはへてゐた。彼は一房の葡萄と清水を取寄せ、自分が今起きて来たばかりなこと、流感にやられたこと、また寝込まなければならぬこと、雑音が気分に障ることなどを語り、扨て不安さうに四囲を眺めまはしたかと思ふといきなり魅力のある笑声を響かせてそ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com